虚子記念文学館投句特選句・令和四年二月

稲畑廣太郎　選

俳磚の日の斑こぼれて名草の芽　大阪　徳澤南風子

二ヽ月の皺にアイロンかけてをり　兵庫　吉村玲子

虚子館の春の雪なら濡れもして　兵庫　玉手のり子

薄氷に風滑りゆく轍かな　大阪　徳永由起子

立春や胸に騒めくもの数多　兵庫　前田容宏

快晴や虚子生誕を祝ぐ二月　新潟　安原　葉

梅が香や静心なる詩心　兵庫　岩水ひとみ

虚子像のまろやかな肩春立ちぬ　兵庫　藤井啓子

春浅し六甲山は寝惚け顔　石川　辰巳昌彦

冴返る神戸を赤い靴で行く　兵庫　江川由美

入選句・令和四年二月

春立てば虚子館光るものばかり　兵庫　平田　惠
早春の旅ごころとは半開き　大阪　石橋玲子
春時雨オンラインにて語る虚子　大阪　山田佳音
立春や明るき未来疑はず　兵庫　森岡喜惠子
立春やまほろばは虚子記念館　兵庫　川村ひろみ
虚子館へ立春の歩の勢かな　滋賀　礒田ひろみ
公魚の軽き命の釣られけり　滋賀　石川多歌司
地に未来託し寒肥施しぬ　大阪　多田羅紀子
俳諧に集ふ虚子館春立つ日　大阪　徳岡美祢子
御快癒を春待つ心もて祈る　兵庫　山之口倫子
海光に育つ庭影春浅し　兵庫　奥田好子
ランドセル背負ふ子らの背にある余寒　三重　池本準一
春浅くとも水音のひびく庭　兵庫　内田泰代
芦屋への鉄路断たれし余寒かな　兵庫　黒田千賀子
拝顔の叶はぬ句座やミモザの黄　兵庫　西村正子
春浅し友の背を追ふ持久走　兵庫　武田奈々（青少年）
結末の知れぬ小説春浅し　兵庫　武田優子
春浅き六甲駆けおりて来る水音　兵庫　中井陽子
どことなく明るき兆し館の春　兵庫　深尾真理子
国栖奏の宮とを繋ぐ誇りもて　大阪　西尾浩子
国栖奏に帝の歴史学ぶ旅　兵庫　中村恵美
風折れの小枝に蕾浅き春　兵庫　山田佳乃
室咲きに囲まれ廻しゆく清記　兵庫　永沢達明
春立ちて空の両端広ごりぬ　兵庫　槌橋眞美
春雪に君の面影かさねつつ　鳥取　前田　千
薄氷の流れは見えず芦屋川　石川　辰巳葉流
邂逅を果たせし思ひ梅二月　兵庫　岸川佐江
地図帳の海広々と春立ちぬ　兵庫　辻　桂湖

米子城址雪の大山従へて　兵庫　小川孝子
金メダル添へて建国記念の日　兵庫　池田雅かず
雪解けの風に住みたる奥丹波　京都　杉森大介
かざす手に瀬戸内の島風光る　奈良　堀ノ内和夫
国栖奏の翁いつもは別の顔　兵庫　塚本武州
ドーピング疑惑の少女春浅し　兵庫　岩鼻絹子
料峭のヘッドホンから演歌かな　和歌山　中島紀生
虚子年尾句碑に高鳴る春の川　石川　伊東弥太郎
盆梅の白きはだちて緋毛氈　兵庫　高橋純子
芦屋駅大工事中クロッカス　大阪　谷本房子
一輪の梅に言霊寄せてをり　愛知　加藤清美
雑魚探す目に春の川渡りけり　石川　西田梅女
俳諧の深化を願ひ春を待つ　京都　西村やすし
ホトトギス千五百号春立ちぬ　香川　三宅久美子
紅梅の庭に向かひし玻璃閑か　大阪　徳澤彰子
春の川吾も魚影を探す眼に　石川　西田さい雪
川沿ひのだらだら坂や梅日和　兵庫　山崎渺美
天心へ春満月のくつきりと　愛知　小野　薫
三寒の梢に四温の宿木まどか　神奈川　小堀公美子
茹で汁の野の香たちこめ雨水かな　兵庫　足立朱麻
春寒し芦屋川なほ水乏し　兵庫　阿曽宏之
老木の紅梅見事に咲き誇る　兵庫　高市敦之
黒海に砲声響き凍返る　神奈川　平野孤舟
ウと打てば出るウクライナ春寒し　兵庫　キートスばんじょうし
堰音の弾む川辺や草青む　兵庫　田村惠津子
空ばかり見ている日あり犬ふぐり　神奈川　金子三奈乃
なゐのこと孫らに伝ふ春浅し　東京　宮村士々
遠富士は茜に染まり大枯野　埼玉　土井洋子
裸木に落しきつたる力あり　神奈川　進藤剛至